

散らばる言葉

東雲咲夜

微熱

ほんのすこし

熱さを感じているのに

抱きしめる腕は

想いが強くて 離れなくて

絡めた指が

いとおしくて 離せなくて

緩やかにこの身を侵していくのは

眩暈がするような 甘い 微熱

黄昏時に唄を

夜の帳が下りて 静かな闇に包まれるその前に
あなたの唄が聴きたい

道端にひっそりと咲き誇る花を見て 綺麗だという
零れ落ちる涙を拭っては 優しく微笑んで

迷いながらもすべてを受け入れようとする 澄んだ眼差し
この名前を呼ぶ何色にも染まることのない 透明な音

あなたが紡ぐすべてのものが わたしへと触れて
暖かくしていくから

あなたの唄が聴きたい

月が色を変える前に この黄昏に手が届かなくなる前に
あなたの唄を聴かせて

刹那の瞬間さえも 永遠へと変わるから

カニバリズム

愛しいお前へ

いつか二人がわかたれる時俺のことを愛しているならば

俺を喰らい尽くしてくれ

お前と離れたくないんだずっと一緒にいたんだ
だから 食べてよ

お前が俺を喰らい尽くして俺はお前とひとつになれる
血が肉が骨が心臓が
お前のすべてを作る

これなら、何も怖くないだろう

甘いくちづけも 塩辛い涙もさようならさえもいらない
愛してくれたなら 喰らい尽くしてよ

お前が先に死んでしまったら
俺はお前を喰らい尽くす

ありがとうは また会ったときに

仰ぐ月に紅を残して

時にまどろみながら 永い夜を渡り歩く
留まることも振り返ることもせずに 人間の流れの中を進んでいく
どこからきて どこへゆくのかと 月に問えど
降り注ぐ光のなかに答えは見つからず
地に流れていく赤に月を映して 踏みにじる
はじけた雫は 闇へと溶けた

綺麗な夜に 一輪の赤い花が咲いて
この場所から どこへゆくのかと 花に聞いた
ふたりならばどこへでも 夜が明けるその瞬間まで

時を数えることも忘れて 終わりを探して夜を歩く
咲き誇ってはまたたく間に消えていく 人間の営みを追い越して
風になびいた その髪を照らす光に 永遠を見る
答えは見つからずとも今のままだもいいと
指先に触れる赤を掌で包みこんで くちづける
零れた言葉は 夜へと消えた
この身の赤と その身の赤と

仰ぐ月に紅（こう）を残して

目隠し

貴方はいつも私の目を閉ざす

隠してしまっては 何もわからないというのに

肌に触れる指は暖かく

頬に落ちる唇は冷たく

ああ 貴方の表情が見えない

暗闇の中では手を伸ばしても届かない

きっと 私の涙も貴方には見えていないのでしょうかね

伝い落ちる前に消えてしまうのだから

蝶のさなぎ

ふわふわと舞い飛ぶ蝶になって

空を飛べたらと思う

そうしたら、きっとわずらわしい全てから解放されるのに
地べたにはいつくばらなくてもすむのに
けれど

すぐに磔にされてしまうかもしれない
大きな鎌に捕らわれてしまうかもしれない

一瞬を美しく生きると 人生を醜く生きると

どちらかなんて 選べやしなくて

うらめしそうに空行くものを見上げながら
今日も地に足をつけて生きていく

もがき続ける僕を取り囲んでいるのは
透き通った透明な虫籠

いいわけ

ぼくのため わたしのため きみのため あなたのため
誰かのためにすることは どこまでも美しい

愛して いくしんで 憎んで 壊して
誰かのためならば どこまでも堕ちていける

本当は誰かのためなんかじゃない

止まることのできない理由が欲しいだけ

幸福に盲目

しあわせの匂いを感じると
泣きたくなるのはなぜだろう？

もっとよく見たくて 目をこらすのに
ぼやけ霞んで 溶けてしまう
冷たさを感じて やっと気づいた

羨ましいから 悲しいのだと

求めても叶わないと知っているのに
お願い続けるのは 寂しいね

しあわせは まぶしすぎてみえない

手を伸ばしたなら

目の前に手を伸ばしてみるけれど
何もないから からぶりをする

少しだけ悲しくて くじけそうになる

でも 今はなにもないけれど
ずっと遠い未来でも 明日にでも
いつか誰かが、この手を取ってくれるなら

伸ばした指先に触れてくれるのなら

差し伸べたこの手もきっと無駄じゃない

まだ見ぬ誰かにめぐり合う日まで

この手を 伸ばし続ける

幸福に盲目

しあわせの匂いを感じると
泣きたくなるのはなぜだろう？

もっとよく見たくて 目をこらすのに
ぼやけ霞んで 溶けてしまう
冷たさを感じて やっと気づいた

羨ましいから 悲しいのだと

求めても叶わないと知っているのに
お願い続けるのは 寂しいね

しあわせは まぶしすぎてみえない

灰雪

アスファルトに降り積もる雪

傘を差しながら足跡を刻んでいく

鈍色の空を見上げてふと思う

ずっと昔は傘を差さずに歩いていたのに

いつからか 降り注ぐ雪をわずらわしく思って

あの頃はきっと 真っ白な雪と真っ白な心だったのだろう

今の私に降り注ぐのは

重く濁った 灰色の雪

楽園

平和という名の鎖に縛られた
美しくも愚かな天使たち
煌びやかなイミテーションの世界で歌を紡ぐ

奏でるのは至上の音 背負いしは至高の罪
疑うことを知らず 永遠を信じ神を愛して

その背の翼はすでにもがれているというのに

絡みつく荊に囚われたのは 在りし日の姿
その瞳はなんて悲しそうなのだろうか
堅牢な檻のごとく 揺るがぬ世界の中

偽りの楽園に捧げる 荊の冠

指先の不可視

手を前へと伸ばしてみようか

何があるかな

すべすべ ざらざら めるり？

ひりひりしたり、冷たかったりかもしれないね

五指を動かしてごらん

つってしまったなら ごめんなさい

何もなかったの？ それは仕方が無いね

なんにも望んでいなかったんだろうから

楽しいことや悲しいこと、嬉しいことにむかつく事

どれをつかんだって離しちゃあ いけないよ

必要ないなんて一時だけさ

何処かへすっとばして、後であわてて探すんだろうから

いつだって未完成 足りないものを探してる

完成なんてどこにもないんだよ ここにも

あそこにも 頭の中にも

指先が触れて、気づけたならラッキー

ぐるぐる回る長い道 遠くを引き寄せてもいいし

回り道を引っ張ってみてもいい

指を一本動かせば できるでしょう？

伸ばした手の先にあるのはいつも不可視

見えないが故にいとおしく忌まわしいもの

形作って 彩るのはあなたの指

さあ 手を前に伸ばしてみようか

五指を思いっきり広げたら

不可視をもぎとってごらん

あなたが望むがままに かたちはなるだろうから

見つかったなら、口の中へと放り込んで……

咀嚼してしまえ

ダミーロボット

一つの"人型"がひとりの"少女"に恋をした

ただひたむきに恋い慕い
金色の繊維に赤を鎧う
合成音の囁きは彼のもの

リンゴみたいに色づいたほほ
あやめ色した瞳に銀の髪
鈴の笑い声は彼女のもの

彼の仲間はいくらもあつて 彼女の友人は必死でとめた

機械仕掛けの騎士さまはお姫様を守る
いっしょうけんめい 精一杯に
でも誰から? そしてなぜ?
知らぬままにざわめく心に従って

それは彼の思いだけ 彼女はそばにいてほしかったのに

ばったばったとなぎたおして
兵隊さんはバラバラ 彼も割れて壊れちゃった

いくら嘆いても少女の涙じゃくつつかない

馬鹿な"理論"を吐き捨てる科学者が"偽物"を作った

姿かたちはそっくり同じ
メモリーだってお手の物
それでも笑顔はダミー

心は複製できなくて別のもの
それでも彼は彼女に恋煩い
想いだけはフェイクにならなくて

『邪魔をするやつがいるのなら俺がぜんぶ壊してやる』

同じ声と姿と言葉で偽物は囁く
信号が回路を走るがままに
位相はずれているけれどそれは真実
そこにダミーはあるの？

ダミー・ロボット It is human?
彼女は涙をこぼしこぼし 首をいやいや
ダミー・ロボット It is naughty?
彼は手を伸ばしてみても ひっこめてる

機械仕掛けの偽物はお姫様をほしがって
枯れない音を囁らして ぎりぎりまで手を伸ばして
傷つきたいわけじゃあないのに 追い詰めてしまう

お姫様は偽物から悲しそうに遠ざかる
あなたは違うのと叫んで 彼だけど彼じゃないのと
嫌いなわけじゃあないのにと 小さな胸痛めながら

偽物の中には想いはあって 彼女のなかにもそれは同じ
でも姿かたちには宿ってなくて
記憶の中に心はあるの？

ダミー・ロボット
I wish for she be always filled with Happiness

ダミー・ロボット
Thank you for a lot of Memories

"彼"の仲間が"偽物"を壊した 彼のままでいられるようにと
壊れたダミーに彼女は花を手向ける
記憶の中で彼は生き続ける
合成音の囁きは恋の調べ

かわいそうな しあわせな
ダミー・ロボット

秋雪

気付いたら裸足のままで 湿った落ち葉を踏みしだいてた
ぐんにゃりと伝わる 裏側からの感触
匂いだけはなくて
人のいない小道を歩き続けて
少しだけ吹いた風には冬の気配

誰かが傍にいたような でも今はひとり
ああ そうだ 誰かは殺されたんだった
それはあの人に、それとも私に？

鮮やかな道は色をなくして 冷たさもなく足はかじかむ
微かな雪踏みの音 響いて
仰いだ空は凍てついた 舞い踊る雪片

膝を抱えてうずくまる 白い世界の中で虚ろに
遠くの気配はあの人だろうか
どうして私も消してくれなかったの
なんで、生きろなんて言うの？
凍える体を包んで暖めては また世界へと逃がして

眩しいものを遠くを見るような瞳で囁かないで
今も見ているのなら せめて止めをさして
同じものになれない させてくれないのなら
吐き出した言葉を空に溶かした欠片で 傷を
秋のように染まるまで

氷の花開く惑い道 赤に吞まれる迷い道
夢うつつで何度も廻る小道に
うっすらと残る足跡は朱に囚われて
凍てつく心の温度の中には あの人の言葉だけが灯る
残酷な残り香
永遠に続きをみていたくても 許してはくれない

白と赤が混ざり合った 幾重の別れ道 思い出
かざした手を擦り抜け 届かなくなる いつかの夢

あくなきほど溺れ沈む 狭間の季節で 声を聴いて

また目覚める

罪唄

私が二人と出会ってしまったあの日
終わりと始まりの雪の日
狂ってしまったものは心 狂わせたのは私？

あなたが彼を殺してしまった夜
どうしてこんなことになったのかと
私があなただを殺して あなたが私を殺した

男の形だったなら 誤解は生まれなかったのかしら
微笑みやまなざし その意味を達えることも
嫉妬ではなく友情だったなら 三人のままでいられた.....

カインはアベルを殺した あなたは彼を殺した
血の絆を絶ってまで欲しかったものは誰からの寵愛？

そんなにまで欲しかった その理由をあなたは忘れた 私は愛を忘れたふり
私が見ていたのはあなた あなたは私という彼を見た 結末は塗り潰された
彼が失くしたのもも あなたが忘れてしまったのもも
私はすべて抱きかかえていましょう
忘れてしまったなら 届かない想いは罪歌として奏で
あなたに深く突き刺して傷跡を残す
彼の、あなたの、私の罪。背負って償い続けましょう

あなたは私を殺す 私はあなたを殺す
幾度となく繰り返して廻りましょう
いつか時が果てるまで
このかたちが朽ちるまで

私がかたちを選んでしまったあの日
闇から生まれた夜の日
空っぽの私の中で探す 求めたものは愛

糸

生れ落ちたその瞬間から

隣にならんで、同じ立場にたって

歩くことができないのなら

好きにはなるけれども、『愛』すことはないでしょう。

道を分かつ糸は 縁のゆりかごの中で織られ紡がれて

戯れごとに、その腕を寄せるのならば

しなやかな指先で操る、真綿に似て非なる

その糸で

わたしを縊り殺してください。

一思いに、指を引いて 糸を手繰り寄せて

その瞬間という永遠の中に閉じ込めてください。

冷たい死神にも似たその一瞬が、わたしの首に吸い込まれる瞬間

切り落とされた首よりも

美しく微笑んでみせましょう